

仙台市青葉区小松島地区民生委員児童委員協議会

(平成 27 年 7 月)

小松島地区は、仙台駅より直線距離で 2.2～3.5 キロ、戸建て住宅、アパート、マンションが入り混じった混合住宅街です。平地、丘陵地帯が半々程度で、東京ほどではないにしろ、建物が込み入って建設されている地域です。

このような街並み形成から 4 年前の大震災を振り返ると、火災が発生しなかったことが不幸中の幸いであったと思えてなりません。もし、あの 3 月 11 日が乾燥し、風の強い日で、火を使う夜の食事時であったら想像もつかないほど大変な被害になっていたでしょう。また、季節的に日暮れが早く、周囲がことのほか暗かったら、帰宅時間の交通渋滞時であったら、春先の大雪で積雪が 30 センチを超えていたらどうだったのでしょうか。さらに、この震災が夏の暑い盛りに発生していたら、避難先の体育館は多くの人で異常な暑さとなり、トイレは酷い臭気を放ち、不衛生となり食中毒も予想され、伝染病も覚悟しなければなりません。暑さと水不足（断水）で脱水症状、熱中症により重病人の発生を招いたものと思っています。

なぜこのようなことを書くかといえば、3 月 11 日はまだ寒いとはいえ、真冬、真夏よりは体の負担が軽減される時期であり、私たちの地域は季節、天候に恵まれていたので被害があつた程度ですんだのかもしれない、また対応もできたのかもしれないと考えるからです。

これからは、「想定外のことでした」では通用しません。もっと真剣に考えるべきでしょう。1 年に 1 度の防災訓練は最低限のことであり、地区住民は努めて全員が参加すべきで、もっと声かけをしなければなりません。1 年ぶりで各種の訓練を前年どおりできる方はそれほど多くはありません。忘れてしまっているのです。それにもかかわらず、参加者が少なく、顔ぶれが同じであることは非常に残念でなりません。子供会、生徒会の父兄にも関心をもってもらっていただき、若い方がたが中心となっていくことを願っています。

震災が起きたのは、民生委員・児童委員になって 3 か月後のことでした。いまだ活動に慣れていないうえ、町内会長でもあったので、町内会連合会、地区社会福祉協議会、民生委員児童委員協議会、日赤奉仕団のいずれの指示に従うのか、非常にわかりづらく、迷うことが多々ありました。

いろいろな委員を兼ねている方もおられます。今後への課題として、組織、指示系統をはっきりさせておくこと、そのうえで訓練を重ねていくことが大切と思われます。

このような震災は二度と起きてほしくはありませんが、いつの日か、再び襲われることは歴史が証明しています。民生委員児童委員協議会や各種団体の活動はもちろんですが、まずは、その時への備え、その時の行動を住民 1 人ひとりに説くべきと考えます。身体的（食料品、飲料水、家庭医薬品、懐中電灯、ラジオ、傷害保険、訓練参加等）、財物的（消

火器、火災・地震・損害保険等)、組織的(高齢者単身世帯、障がい者世帯の見守り、町内会各班の班長による確認)等、いろいろな備えが必要と思われます。高をくくってはいけません。「備えあれば憂いなし」というではありませんか。要援護者は別として、「自己責任が一番」ということを皆が自覚することが大切です。最後に、人的な備えとして、看護師、介護福祉士の退職者の登録制度(本人同意による)を検討してはいかがでしょうか。